

# 「神からの賜物に應じて喜んで奉仕する」

ローマ12：4-8

堀田修一 24・6・30

序：前節とのつながり。主を信じキリストのからだである教会、共同体の一員として歩む。神がそれぞれに量り与えられた賜物に従って、思い上がりせず思慮深く考え、主と教会に仕える。神はすべてのキリスト者に、質量ともに多種多様な賜物、能力を分け与えておられる。無理をし過ぎず、感謝しつつ奉仕する。

I 「一つのからだには多くの器官があり、しかも、すべての器官が同じ働きをしてはいないように、大勢いる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、一人ひとり互いに器官なのです」：4, 5。

1. 神が造られた私たちの体には多くの部分があり（血液、リンパ、目、口、耳、鼻、手、足、内臓、脳他）それぞれの部分がすべて違った機能を果たし助け合っています。必要のない器官はありません。それが生きている体です。
2. 本日のみことばは、その生きている体の関係と原理を、生きているキリストのからだなる教会の現実に適用しています。すなわち、キリスト者は神により生み出され、それらのキリスト者は、すべて神から個性を与えられ異なっており、同じ働きはしない、一人一人なくてはならない尊い存在です。証し。
3. 主のからだなる教会の素晴らしさは、教会のメンバーが、一人一人、神から与えられた違った賜物、個性を持っていると同時に、キリストにあって一つとされていることです。教会の一致は、ある人間の力で合理的に支配された画一化された一致ではなく（現在のある国々の支配者による強制的な画一化とは全く違う）、それぞれが違っており、神による多様性がありながら、ばらばらではなく、主を中心に互いに愛し合い赦し合う一致した共同体です。主を中心に集まる人々の違いは、争いの種ではなく、互いに補い合い助け合うキリストの豊かさを現す霊的な宝となります。  
※違っている器官が助け合う例。
4. 「一人ひとり互いに器官なのです」→この原語を直訳すると「互いにそれぞれのための器官」の意。このみことばが強調しているのは、「キリスト者の有機的な命の通う一体性ととともに、私たち一人ひとり違い、個性のある教会のメンバーは、かしらなるキリストにより「互いに互いを必要とし支え合う器官」として結び合わされているという恵みです。

II 私たちは、異なる賜物を持っている

1. 「私たちは、与えられた恵みにしたがって、異なる賜物を持っているので」：6。神は一人一人に、例外なく、賜物、能力、個性という賜物を与えておられます。神の前に必要ではない人はいません。生まれぬ方が良かった人もいません。神に造られた人間は皆、神の前に高価な存在です。人が人を差別する思い上がりは大きな罪です。主を信じるキリスト者には、二種類の賜物が与えられています。①創造主の神が、私たちが母の胎内で命が与えられた時から与えられている個性、能力。生まれ育っていく中でそれが現れる。②主を信じた時に心に内住される聖霊による賜物＝主を伝える賜物、能力、主の教会を建て上げる奉仕の賜物、能力。

2. 「それが預言であれば、その信仰に応じて預言し」。初代教会の時代は、新約聖書が完成していませんでしたので、預言の賜物をいただいている人が、神からの「みことば」をいただいて、教会の人々に伝えていました。ローマ人への手紙が記されたAD（ラテン語。年：アノー・主：ドミニ＝主の年に）56年頃も神からみことばを預かり語る預言の賜物を持つ人々がいました。神のみことばがまとめられた新約聖書が完成してからは、教会での預言は終わったと考えられます。なぜなら、それぞれが勝手に神が語られたと言うなら、旧新約の完全な聖書に、人間の啓示が加えられ間違った教えの異端が生まれ、教会が分裂し混乱するからです。現在、この賜物を適用するなら、教会でみことばを説き明かす説教者の奉仕に当たります。この適用で非常に大切な事は、説教者は、自分の考えを語るのではなく、66巻の聖書全体が語っていることを忠実に語り、その時代時代の人々の生活に適用できるように語る事です。現代の預言に当たる説教の奉仕には、聖書全体の理解、神学、神が支配しておられる事実の意味＝教理の理解、説教のみことばを聞くその時代その時代の会衆の人間理解（悩み、苦しみ、喜びへの共感）が必要です。この奉仕は簡単にできる奉仕ではなく深いみことばの掘り下げと聞く方々への愛が必要です。教会員の方々は説教の奉仕者の為に祈ってください。説教は説教者と祈り支える教会員との共同の業、実です。

※人の預言ではなく、神が完成された聖書の通読の恵みと説教の恵みで喜びに満たされている人の証し。聖書通読を助ける「みことばの光」を推薦します。購入者が増えているとのこと感謝します。

3. 「奉仕であれば奉仕し」。この賜物の奉仕は、管理と援助の奉仕です。主の教会の管理運営。

4. 「教える人であれば教え」。キリストの福音とその福音に基づく生活の仕方を、教える奉仕。主を信じていない人々への福音宣教と教会の健全な育成と成長のための、極めて大切な奉仕です。

5. 「勧めをする人であれば勧め」：8. 生きる力を失ったり、信仰の弱さに悩んでいる人はどこにでもおられる。その様な人々に寄り添い、慰め、適切な勧めをすることは欠かせない奉仕です。これは特定の人々の奉仕ではなく、キリスト者は、皆、御聖霊を心に宿しているのです、主から愛をいただいて互いに愛し合い、慰め合い、励ましの勧めをしましょう。この「勧める」という原語は、「そばに呼ぶ、慰める、勧める、優しい言葉をかける」の名詞形です。聖霊が「助け主」と言われる原語と同じ言葉の名詞形です。

6. 「分け与える人は惜しまずに分け与え」：8. 必要を覚える人々に、祈りつつ識別力をもって分け与える愛です。「惜しまずに」とは、真実に、報いを求める下心なく行う愛です。この賜物も現代は、ある特定の人に限らずに、お互いに神から与えられた分に依りて互いに分け与え助け合うことが実践されています。証し：主は私に、ある方に、その人に恩義を着せるようにではなく分け与えるように導かれ、ある時には、私に、ある方から思いがけない愛の捧げものがあり、私の必要が満たされて来ました。神に人に愛の捧げものが出来たとしても、それはすべて神からいただいたものを捧げたにすぎません。

7. 「指導する人は熱心に指導し」：8. 主の教会には、色々な部や委員会がある。そこには、その会で選ばれる指導者がまとめていく。指導者は、人の意見を聞かない支配的な人では、人は心が離れ、ついて来ない。逆に指導者が、会の中の強い人に支配されるようでは、会の人々に信頼されない。「熱心に指導するとは」、肉の肉人的な熱心、前のめりで、空回りする熱心ではなく、神からいただく愛の熱心、すぐに報われなくても、あきらめずに会のメンバーを愛して、一人一人の良さが

引き出され、まとめ上げ、主の教会を建て上げていく熱心。ある責任が与えられたら、このバランスのある熱心を祈り求めましょう。

8. 「慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい」：8。慈善を行うとは、神からいただくあわれみで、困っている人々を援助することです。「喜んで」とは、すべての恵みの与え主への感謝の喜びをもっての意。喜びもなく、義務感や恩着せがましくなされる慈善は、困っている人々に、ますます「みじめさを」を与えてしまうのです。それは神から愛をいただいた人がする行為ではない。「いやいやながらでなく、強いられてでもなく、…神は、喜んで与える人を愛してくださるのです」Ⅱコリント9：7

Ⅲ 現在の教会への適用。新約聖書に、すべての賜物による奉仕が記されているわけではありません。神に感謝しての礼拝（原語：礼拝する、奉仕する、献身する）は最高の奉仕。祈り支えることも最高の奉仕。説教を真剣に聞く奉仕、司会、説教、奏楽、賛美、会場係、受付、礼拝当番、プロジェクター、音響、執事会、子どもステップ、セルグループの支え合い、奉仕の日の奉仕、他全ての奉仕が神の賜物、神の喜び、「宣教と成長」につながります！それぞれの賜物を用いて互いに仕え合いましょう。応答賛美578「用いたまえ」